

寝起きの悪い政治家を起こそう

写真は朝日 22 日朝刊、やくみつる「風刺漫画」元請け・下請け・孫請け。総選挙投票日だ。こんな写真を思い浮かべて、同紙 27 日朝刊「多事奏論」の表題を抜粋して紹介したくなった。



我こそは聞く力がある者である。そう自称する男がいた。ある日、聞く力がある男は権力を欲し、魔女に口を捧げることでその座を射止めた。聞く力がある男は己の思想と、口が勝手に発する言葉とのギャップに苦しんだ……りはせず、思想はすぐに口の僕となった。ある日、聞く力がある男はかつての自分を知る者に「あなたらしくない」となじられた。しかし聞く力がある男はすでに、「自分らしい」とはどういうことか思い出せなくなっていた。私が最近よく見る夢の話、悲しいお話である。

このところ私は、少数派から多数派、権力を持つ側へとにじり寄っていくタイプの転向について考えをめぐらせている。転向者は往々にしてこう弁明する。だって権力を持たないと自分の理想を実現できないじゃないか。大丈夫、ちょっと「死んだふり」するだけで私自身は何も変わらないよ……。そう言って岸を渡ってなお理想を貫けた人を私は見たことがない。「死んだふり」をするうちに人は、本当に魂を抜かれてしまうものなのだろうか？

「1強」の9年間、失神状態に陥ったあの人この人。もじもじと起き上がったはいいが、コロナ対応や行政のあり方など「1強」の弊害をどう総括し、今後をどう構想するかが問われている大事な総選挙で、〈ねえ、聞いている？〉「聞いているよ」〈じゃあどうするの？〉「なんだっけ？まあどうにかするよ」。寝起きの悪い家族の朝のごとし。そんな物言いから、いったいどうやって投票の判断材料を得よと言うのか。

ただ、日の丸の小旗をはためかせ、熱狂を演出する前回までの「スペクタクル選挙」がやりづらくなったのはよかった。「コロナ脱却V字回復解散」なる前々首相の名付けも全然広まらなかった。現首相のもじもじのおかげであるとは思う。

有権者が無関心ということではおそらくない。「熱」は感じる。なのにどこか「静かな」総選挙である。なんなのだろうか？

人々が真剣に、自分の足元から政治のことを考え、候補者の声を聞き分けようと耳を澄ませているからこそその静けさではないかと、期待込みで思う。コロナ禍によって、政府の判断がいかに関心するの生活に左右するの、思い知らされた。「おまかせ」で安心して政治や行政がこれほど鈍っていたとは衝撃だった。病床逼迫で入院がかなわず、自宅でひとり亡くなった方々の恐怖と絶望に思いをはせた時、ちゃんと考えて、ちゃんと1票を投じなければという決意が凝固する。この社会に共にあった者として、花をたむける代わりに。

寝起きの悪い政治家たちは、選挙でたたき起こすしかない。

(2021年10月31日)